

緊急地震速報と避難行動 —白石中学校の例—

東洋大学社会学部 中村 功

2008年の岩手・宮城内陸地震

- 岩手宮城内陸地震 2008年6月14日午前8時43分
- 緊急地震速報 2007年10月から供用
- 緊急地震速報が間に合った
5弱の仙台市宮城野区では15.32秒の猶予
白石中学校、緊急地震速報の伝達装置「まえぶれくん」
主要動の21秒前受信、すぐに校内放送



放送内容と教員の対応

- 地震の10秒ほど前に校内放送

「ピンポン。地震が来ます。机の下にもぐってください。あと10秒です。机の脚をつかんでください。外に出ないでください」（繰り返し）「先生の指示があるまでそのまま待ってください。外に出ないでください」

- 大人たちは信じず、避難行動もしなかった

教員室だれ一人として机の下にもぐらず

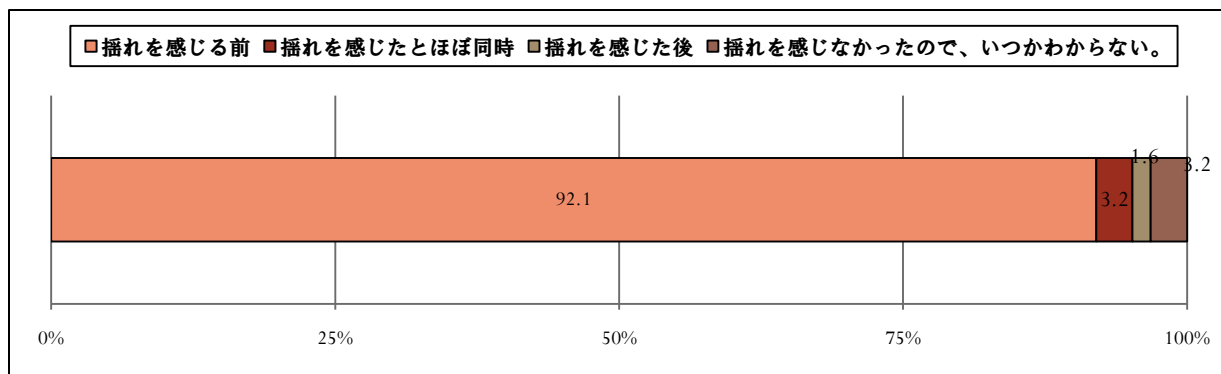
「誤作動かな」「何いたずらしてるんだろう」

- 地震の3日前に訓練

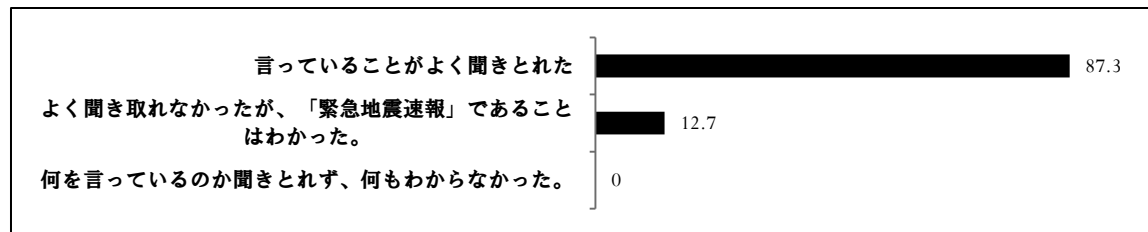
校内放送を流し、避難経路の確認

生徒へのアンケート調査

- 地震当時、学校には自校の生徒が約100人、他校の生徒が10人ほどいた
- 63人にアンケート
- 間に合った緊急地震速報

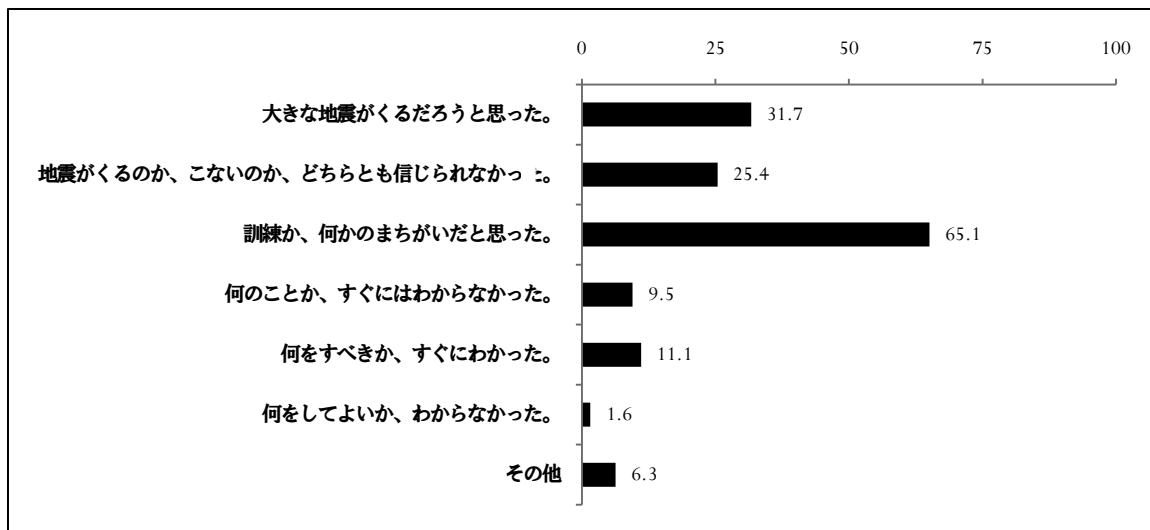


緊急地震速報を聞いたタイミング



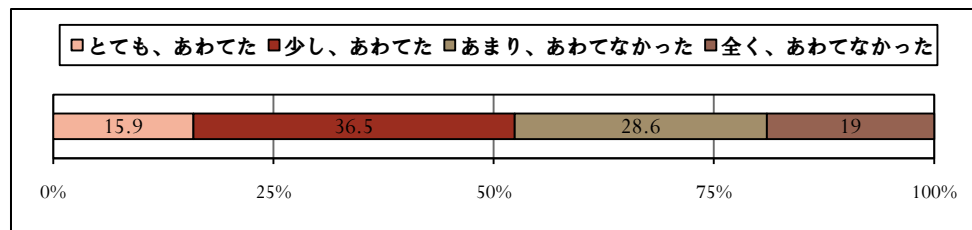
聞き取りの明瞭度

なにかの間違いだと思った



放送を聞いてどう思ったか

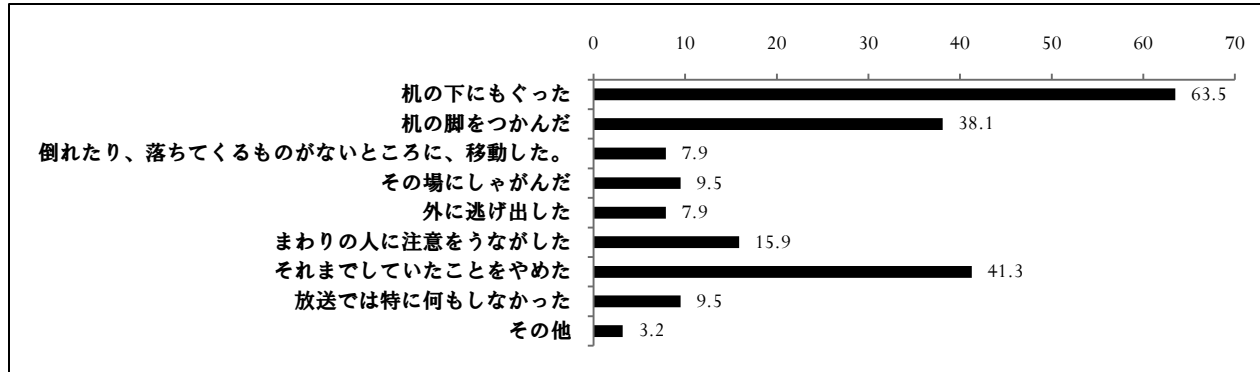
•比較的冷静だった



聞いた時にあわてたか

聞いた時の行動

- 教室では8割が机の下にもぐった



聞いた時の行動

	教室の中	教室以外の校舎の中(廊下・トイレなど)	体育館や武道館の中	学校敷地内の屋外(校庭など)	その他
机の下にもぐった	78	40	83.3	0	16.7
机の脚をつかんだ	53.7	20	16.7	0	0
倒れたり、落ちてくるものがないところに、移動した	7.3	0	0	40	0
その場にしゃがんだ	4.9	0	0	0	66.7
外に逃げ出した	0	60	0	40	0
まわりの人に注意をうながした	19.5	20	0	0	16.7
それまでしていたことをやめた	43.9	80	16.7	0	50
放送では特に何もしなかった	7.3	0	16.7	20	16.7
その他	0	0	0	20	16.7

聞いた時の行動 (場所別, %)

「パブロフの犬」と「指示への服従」

- 生徒は本当のことだとは思わなかったのに、適切な行動をとった
- 本当のことだとは思わなかった生徒でも約半数は机の下にもぐっている

緊急地震速報を聞いた時の感想別の机の下にもぐった人の割合 (%)

	思わない	思った
大きな地震が来ると思った	46.5	100
訓練か何かのまちがいだと思った	86.4	51.2

- 訓練や、放送内容が机の下にもぐるように何度も呼びかけたことの成果
- 理解→判断→避難 以外に、
刺激→習慣→避難、指示→服従→避難

評価

・過半数が「役立った」



まとめと考察

解釈1 緊急地震速報は、白石中学校で有効に機能

- 背景

訓練が役に立った 42.9%

机の下にもぐるよう繰り返し呼びかけたこと

「あまり考えず、すなおに放送の指示にしたがった」 27.0%

- 単に緊急地震速報を知らせるだけでなく、適切な行動指示を出すことが重要

解釈2 緊急地震速報が有効に機能するのは難しい

- 教職員は避難行動をしなかった
- 本当のこととは思わない人々(教職員・生徒)
- 訓練・教育をしていたはずなのに

解釈3 緊急地震速報は全員に有効なものではない

- 訓練可能で(素直な)子供には有効